

金沢大学附属図書館シンポジウム

これからの大学図書館を考える

開催日 平成7年11月21日(火)

場 所 金沢大学大学会館中集会室

金 沢 大 学 附 属 図 書 館

金沢大学附属図書館シンポジウム

『これからの大学図書館を考える』

・日時 平成7年11月21日(火)

13:30~17:00

・会場 金沢大学学生会館中集会室

・パネリスト

図書館情報大学助教授	永田治樹
金沢大学理学部教授 (総合情報処理センター長)	須原正彦
金沢大学教育学部助教授	野田研一
金沢大学留学生センター教授	八重澤美知子
石川県立図書館長	表政直

・司会

金沢大学附属図書館長(工学部教授) 小堀為雄

【進行】

ただいまから、金沢大学附属図書館シンポジウムを開催いたします。

最初に小堀附属図書館長からご挨拶を申し上げます。

【附属図書館長 小堀為雄】

本日は、附属図書館シンポジウムを開催いたしましたところ、多数の皆さんがご出席いただきまして、ありがとうございました。内心、こういう図書館シンポジウムなんてものを開きましても、はたして皆様にご出席いただけるだろうか、非常に心配しておりましたが、このようにたくさんの皆様方にご出席いただきまして、誠にありがとうございました。これで館長の首もなんとかつながったようでございます。

さて、一般に情報化時代ということで非常に騒がれております。また、大学におきましては、皆さん、図書館は大学では非常に重要な施設だとか、大学の顔だとかよくおっしゃっていただくのでありますが、実際に私この図書館に参りまして、いや、これは大変な所へ来たなという具合に思いました。実際の仕事は、非常に裏方さんの部分が多くて、皆さんの目に見えないところで図書館職員は頑張っておるわけでございます。

そういうこともありまして、このシンポジウムを開くことによりまして、図書館というものを見ていただきたいということが一つ、それから、これからの新しい図書館はどうあるべきか、これは本日の課題でございます。これにつきましては、これからパネリストの先生方からお話をお聞きできるかと思えます。

いずれにいたしましても、昨今情報化時代ということが言われますけれども、やはり何と言いましても図書館の職員によるデータベースの構築と、それから総合情報処理センターとの連携、これらが、これからの図書館でないかと、そういうふうに思っております。ただもう一つ、従来の図書館の業務、これも非常に大学図書館としても重要な業務であります。既存図書保存整理、それから、実際に図書を手に取って見ていただく。文献検索のみならず、本に接するという点でも非常に図書館としての運営を要すると思っておりますので、今日は、パネリストの先生方から忌憚のないご意見をいただきたいと、このように思っております。また、学長先生には、お忙しいところわざわざご出席いただきまして、後ほどご挨拶いただきたいと思っておりますけれども、かさねてお礼申し上げます。

#### 【進行】

ありがとうございました。

続きまして、金沢大学の岡田学長からご挨拶をいただきます。

#### 【金沢大学長 岡田 晃】

本日は、ただいまの図書館長のご挨拶にありましたように、「金沢大学附属図書館シンポジウム」これは初めての試みだそうでございますが、たくさんご参集いただきまして関係者として厚くお礼を申し上げ、一言ご挨拶申し上げます。

高度情報化社会の到来という真っ直中で、われわれは専門分野や、あるいは研

究方法の違いこそあったとしても、文献をはじめとしたいいわゆる学術情報のスピーディーな入手というのは、これはその研究、あるいは場合によっては教育にも非常に大きくかかわるものであるということが言えるかと思えます。言うまでもなく、大学図書館は教育研究の重要な情報流通の拠点でありまして、大学の学術情報流通の促進にかかわる中心的役割を求められています。

ご承知かと思いますが、去る平成5年12月に学術審議会学術情報部会から「大学図書館機能の強化・高度化の推進について」という報告が出されております。大学図書館においては、学内LAN、あるいは電子的情報資料の活用を図るなど、大学の情報基盤の整備というものが急速に進展する中で、その機能の高度化・強化を図っていくことが必要である旨の指摘がなされております。

さらに、本報告では情報化・国際化・生涯学習の進展などの大学や社会を取り巻く新たな状況への大学図書館の適切な対応も求めています。

本学においても同様であります。現在、戦後最大とも言われている規模で大学改革が進められておりますが、大学図書館においても、大学が進むべき方向と理念を見定め、新たな改革への指針を得るために自己点検・評価を積極的に実施し、図書館活動全体の改善に努める必要があるかと存じます。

このような大きな変革期を迎えている時期に、このように学内外の諸先生から時宜を得たご提言を頂戴し、また、ご参加の皆様との意見交換を通じまして、本学の図書館のサービスの一層の充実が図られ、また、県立図書館をはじめとした地域社会との結び付きが促進され、あるいは、もっと大きなネットワークの輪が広がってくるならば、これ以上の喜びはないと考える次第であります。

最後に小堀図書館長をはじめ関係者の皆さん方のこのシンポジウムにかける熱意に敬意を表し、成功裡に終わることを祈念して、簡単ではございますが、ご挨拶とさせていただきます。

## 【進行】

どうも有難うございました。本日のシンポジウムは、「これからの大学図書館を考える」というテーマで、学内・学外から5人の先生方をパネリストとしてお迎えしております。そして、それぞれの立場からのご提言を頂戴することにしております。先生方のご経歴等につきましては、後ほど司会者の方からご紹介させ

ていただきますが、本日の司会是小堀図書館長が勤めさせていただきますので、よろしくお願いいたしたいと思います。

それでは、シンポジウムに移らせていただきます。

#### 【司会】

それでは、ディスカッションに入りたいと思いますが、それに先立ちまして、本日のシンポジウムの趣旨を申し上げたいと思います。

当金沢大学は今年3月をもって総合移転の第1期計画を完了いたしました。当図書館は平成元年に丸の内キャンパスからこの地に新築移転いたし、今年で7年目を迎えました。

一方、先ほどから学長先生もおっしゃったように、社会は情報処理や通信技術の発展あるいは情報化、国際化、生涯学習社会へと変化してまいりました。それらに対応した本大学の附属図書館の在り方を検討するということが一つでございます。いずれ行われます自己点検・評価の一環として学内外の有識者をお招きし、それぞれの立場から、これからの図書館の在り方についてご提言いただき、これらをふまえて図書館運営に生かしていきたいと思っております。また、昨今公共図書館が見直され、市民の図書館として慕われています。これらの図書館と大学図書館の役割についてもお話しいただければ幸いです。

それでは、パネリストの先生方にだいたい約20分間程度づつご意見をお願いいたします。

まず、永田先生でございますが、皆さんご存知かと思っておりますが永田先生は、平成元年本学附属図書館の閲覧課長としてご就任になりました。業務用計算機の導入等、図書館の移転の折の非常に多難の時にご活躍をいただきました。その後、北海道大学庶務部研究協力課長、東京大学附属図書館情報サービス課長を歴任されまして、平成6年4月に研究者としての道を選ばれまして、現在、図書館情報大学助教授として今日に至っております。今日の学術情報システムの形成に深く関わってこられまして、大学図書館の評価法設定のための全国調査など常に時代を直視し、現在も国立大学図書館協議会図書館情報システム特別委員会の委員でございます。そして、次期電算化に向けていろいろとご研究をされておられます。今日は図書館・情報学の研究者と、同時に職員としてのご経験も踏まえられまし

て、忌憚のないご意見をいただければと思っております。

【図書館情報大学 永田治樹】

どうもご紹介ありがとうございました。ただ今のご紹介にありましたように、私はこちらに以前にお世話になっておりました。ちょうど角間移転の時期でした。角間に移転して、半年ほどで首になりまして札幌に移りましたが、その頃にやはりこのような催しをしたことを、こちらへうかがう飛行機の中で思い出しまして、二つのことを確認しておりました。一つは、その時学術情報センターの先生がネットワークの話をされましたが、あの頃の段階のネットワークと、今我々が問題にするネットワークとは隔世の感でして、まったく違った状況になっているということです。もう一つは、それにしても図書館の抱えている問題の多くは、あまり変わっていないということです。そんなことを思い浮かべたのですが、本日のお話は、「これからの」ということをございまして、まず今話題のデジタル図書館とはどのようなものかというお話をします。またそういった技術的な側面だけでなく、お手元のレジユメで言えば2の方も強調したいのですが、たぶん1だけで時間いっぱいでしょうから、補足の際に2のことにふれたいと思います。

さっそく、1番目のお手元のレジユメの「情報環境の変化と図書館の対応」というところをございすけれども、情報環境という言葉は非常に大雑把な意味合いでありまして、我々を取り巻いている情報に関わることを全て含むような言い方であります。情報環境の変化の第1フェーズは、図書館になによりも大きな衝撃を与えた情報の急激な増大であります。第2次世界大戦後、学術の進展により情報が急速に増え始め、今なお加速して増えています。個々の分野で雑誌のタイトル数が大変増えていたり、あるいは論文数が非常に増えていたりすることは皆さんご経験のとおりでございます。図書館では、利用者の要求に対応するためにそれらを確保しなければなりません。このように情報が非常に増えてきますと図書館ができることと言え、予算には限りがありますので、情報資源をシェアするという、つまり図書館間で相互協力するということでした。そしてその相互協力をするためには総合目録がほしいということで、我が国を含めて戦後各国で総合目録が作られたわけであり、それから現在に至る過程で何が変わったかということ、基本的な考え方は変わらず、これらの仕事が機械仕掛けで行われ

るようになったことです。つまり、総合目録がデータベースになり、そして、その相互貸借事務が機械仕掛けの I L L (Inter Library Loan) システムにのりました。このように基本的な考え方は変わらなかったものの、状況はかなり大きく変化しました。圧倒的な情報量の増大は今なお続いており、システムによるサービス・サポートが非常に機能しているのです。ただし、所有(蔵)物を共有するという事は、ある意味では不自然な行為でありますから、I L L は必ずしもうまくいかないことがあります。そういう障害は、基本的にその不自然さから発生しております。この点については、また、後ほど戻ります。資源の問題はスキップさせていただいて次のフェーズです。

次の第2フェーズは最近実現した状況であります。それは、デジタル情報の一般化と、情報ネットワークの進展ということで言い表せると思います。コンピュータによる情報処理技術が高度化し、また通信技術と結びついて情報ネットワークを展開したのです。このことが図書館にどんなことをもたらしているかと言いますと、一つは膨大な情報を一挙に処理するようになったことです。情報のデジタル化によって最初に出てきたのがオンライン・データベースサービスであり、最近一般化しているのは、CD-ROMのようなものですね。いずれも新しい媒体に大量な情報が入っており、それがまた、要求に応じていとも簡単に大量に提供できるのです。二つ目は、ネットワーク情報資源の増大ということです。ネットワーク情報資源というのは、ネットワークに接続されたコンピュータ・ファイル(情報サーバ)に存在する情報で、中身は電子ジャーナルとか、電子ドキュメントとかいうようなテキストであったり、もっと多いものではソフトウェアとか、数値データ等です。これらがネットワークの進展と共に急激に増大しております。そして、昨今マスメディアでもよく取り上げられるインターネットのWWW(World Wide Web)のようなブラウザで快適に情報が探索できるようになりました。ネットワーク情報資源の中には重要な学術情報がたくさんあります。三番目には「新しい学術情報の流通経路」という言い方をしました。これはネットワークそのものであります。図書館というものは、これまで情報生産者、つまり研究者の研究成果である学術情報を図書、雑誌などの媒体により流通しているのを収集し蓄積して、消費者、つまり研究者などに提供するという関わり方をしてきたのですが、ネットワークは可能性としましては、生産者が直に消費者、利

用者に提供する経路となりますし、また、そのような直接的な流れに限らず、非常に有効な情報の流通経路となるのであります。そこで昨今話題になっているのが、このような新しい情報メディア・流通経路を活用するデジタル図書館であります。

デジタル図書館というのは、これまで電子図書館とか、壁のない図書館、あるいは、バーチャルライブラリーなどのいろいろな言い方で言われています。それぞれ機能の様相が若干違うのでありますが、デジタル化した情報をその情報ネットワークを通じて提供するということは同じです。デジタルライブラリー、デジタル図書館という方が最近好まれていますので、ここではその言い方を採りたいと思います。ところがこの議論の範囲は蓄積から提供サービスまで非常に広く、また、図書館が本来どんな機能を果たすものかというところが確認されずに、技術的な解決策だけの議論が先行しがちですので注意を要します。そこで本日は概念的な話よりも具体的な事例を示して、イメージをつかんでいただきたいと思っております。

オランダのティルブルグ大学の例であります。デジタル図書館に関してアメリカあたりのケースは非常に技術的には面白いのですが、バランスがとれているという点で、この大学のケースが良いのではないかと思います。ここでご紹介します。ティルブルグ大学は、1927年にオランダの一番南の州に設置された社会・人文科学系の大学で、現在学生数は10,000人位の大学です。この大学は、私どもも経験がありますが、1980年代の後半までは図書館の機械化にもかなりの人が反対するような大学でありました。しかし、今後大学がどのような方向に進んだらよいかということを経験して、大学全体で議論するようになって、特にコンピュータの更新の問題から話が発展しまして、情報を大学はどのように扱うのか、コンピュータ機能を大学人がどのように享受するのかといった議論が行われるようになり、ネットワーク構想が具体化しました。そして、情報センターと大学図書館とが協力して学長を説得し、ついには教員も学生も事務員も全ての人がコンピュータを活用するようにしようということになったわけです。

図書館はその際に、この学内ネットワークに情報サービスを提供するという提言をしました。情報サービスをするということになりますと、単に図書館目録（オンライン目録）だけではどうにもならないわけです。利用する方は主題別の



索引がほしかったり、あるいは論文目録、さらには本文もほしかったりするわけですね。そういったことに図書館は非常に積極的にその時期から取組み始めました。地域の会社と協力したり、州政府の金を使ってデータベースを作ったりしました。それにインテグレイテッド・デスクトップというアイデアがありました。これはパソコンであります、このパソコンから図書館内サービスを統合的に入手できるというアイデアで、そのために各種のソフトウェア開発が必要でした。実はこれが成功したということで、この大学が一躍有名になったのであります。全学にパソコンやワークステーションが配布されておりますし、図書館内にも450台のデスクトップが置かれています。このデスクトップから目録情報データベースやテーブル・オブ・コンテンツ・データベース（雑誌の論文タイトル）、それに全文データベース、画像データベースを使うことができます。さらに学内情報ネットワークによる外部への接続とかメール、ワープロ、表計算等の機能も利用できるのです。情報サービスとしては、2次情報だけでなく画像データベースとか全文データベースも入っているのであります。これらの開発研究については、EU（ヨーロッパ・ユニオン）の研究助成金を得ておまして、また、エルゼビアという世界最大の学術出版社（今やパーガンモンもアカデミックプレスも皆エルゼビアなんです）が経済関係とかエンジニアリングの雑誌論文をSGML形式や画像のデータベースで提供し協力しております。著作権をクリヤしながらサービスするというところまで現在に至っているわけです。

もう一つ興味深かった点は、この大学図書館の光景であります。この図書館は元々人文社会系の図書館でありますので、書架が並んでいて静かな図書館であります。そこにインテグレイテッド・デスクトップが450台もあって、それがうまく併存しているんですね。日本の最近のデジタル図書館の先駆と言われる某大学へ行きますとうるさいし、また、図書資料が非常に少ないのです。ああいうのは図書館とは言いがたいですね。やはり情報を入手でき、そこで学習や研究ができる環境でなくてはいけない。古い情報だけでなく新しい情報を統合して提供できるような、あるいは、新しい情報だけでなく古い情報も統合して提供できるような環境がティルブルグ大学図書館にはできつつあります。

このようなデジタル図書館というものは、レジュメに書きましたように、現時点ではその従来の図書館のサービスをしながら、あるいはそれをさらに強化し

つつ新しいサービスをしていくものであり、また、こういったものの利用性は非常に高くなるのです。例えば、各種の検索が簡単にできる、24時間検索できる、目録からテキストまで連結してサービスされるのです。そして、経済的合理性から言えば蓄積の空間が少なくすみ、人手をくわないなどです。デジタル図書館は今後の新しい情報技術をうまく活用すれば利点からも大変有望な展開であると言えるかと思えます。時間もだいぶ過ぎましたのでレジュメの2については補足で申し上げたいと思います。

【理学部教授（総合情報処理センター長）須原正彦】

本日は、私のような図書館にあまり精通していない者がこのパネラーの席に立たされて当惑したわけですが、図書館、あるいはそれに関係するようなことに全然無関係ではございません。私自身理系の教官としての立場、あるいは、たまたま今、総合情報処理センター長をしておりますので、そういう立場から発言させていただきたいと思えます。私自身図書館そのものの機構の中に入ったことがございませんので、ひょっとしたら誤解をしている点、あるいは、失礼なことを申し上げるかも知れませんが、ご容赦いただきたいと思います。私自身非常に「本気違い」でありまして、本屋さんに浸って本を眺めて、その中からこれだという本を買ったり、それはもちろん専門書だけでなく専門書でないものもあるわけでありまして、暫く本屋さんへ行かないとストレスになるという感じもしております、そういうこともあります関係上、本というものを非常に大事にしております。もちろん、本というのは印刷されたメディアでありまして、確かに近くにありまして手軽に寝転がってでも夜寝る前にでも読めるし、あるいは速読できるわけです。データベースの形ですとシリーズに全部出てくるわけですが、我々はよく、本を斜め読みなんてことをやりますね。ページをパラパラとめくって即座に情報を入手することが出来ます。そういう意味で人間というものは、まだまだコンピュータに負けてはいません。もちろんコンピュータ以上の能力があるわけです。こういうふうに関書、本、雑誌、書籍、そのようなものはメディアとして非常に大事なもので、これまで私どもも充分利用してきたわけですが、図書館ではそういうふうなものを集積したり保管したり、あるいは閲覧したりするそういう業務を行っております。それと私自身、あるいは、

センター長として情報ということにも関係しておりますのでいろいろ考えたわけです。レジメにちょっと書きましたように、やはり相矛盾するような結果の答えが出てきたわけです。実際、後で申し上げますが、矛盾する結果どういうふう克服するかということが、これからの図書館のあり方を示唆しているように思われましたので、そこら辺をお話したいと思います。

私たちは特に研究や教育をやっている立場から、例えば、自分の部屋を見ますと、購入している雑誌あるいは図書、本などがごちゃごちゃしていて整理が悪いので雑然としておりますけれども、たまたま送って来ました雑誌を見ますと、最初は目次をつらつらと見ます。そうしますと、あ、これはちょっと読んでみたいなというテーマの題目に当たります。そういうふうにして当たりますと、その頁をぱっと開きます。そして、ざっと斜め読みでも何でもいいんですが読みます。そうするとその論文の中にはよくリファレンスが載っております。参考文献ですね。そういうふうなものを見ますと、これまでどんなふうな仕事がされて、どのような観点から研究をしたかということがイントロダクションに書いてあります。そのほか、理論とか実験とか結果とかディスカッションの中にもリファレンスがたくさんあります。そういうリファレンスに当たりますと、それを見なければならぬ。あるいは、リファレンスを自分がコピー等をして持っていればいいんですけど、コピー等がなければ自分で入手しなければならない。そこで、学科にあるものだったら学科、この図書館にあるものだったら図書館まで来て見ることが出来るわけですけれども、もしそれがない場合はどうしても外にそのコピーをお願いしなければならない。そこでそういうふうな場合、今はILLによる図書の貸借のシステムあるいは、文献複写サービスが十分あるのですけれども、実際、やはり入手までに時間が掛かってしまうわけです。そういう意味で印刷物というのは、非常にディストリビューションが悪いものだと思うわけです。さっき図書館から図書館のパンフレット等をいただきましたが、これをたまたま部屋へ持って行って置いておけば、もう研究室の誰も見られないわけですし、こういうふうには、印刷物は非常にディストリビューションが悪いので、ベストセラーでもたかだか数10万人の人が見るだけで、もちろん、貸借で多くの人になるかもしれませんが、結果的にほとんど死蔵図書となってしまっているような感じを私はするわけです。先ほども、図書館の蔵書の中で30パーセント位が利用されれば充分

だとの話が出ましたが、それは非常にもったいない話だと思いますけれども、図書館というものは、自分の部屋にある本のように非常に手近に見られるというふうになっていけば一番いいわけです。そういう意味で図書館というのは、管理を上手にすればいいのかも知れませんが、手元にあるということは大事で、例えば、新しいキャンパスで理系の図書館というふうなものがあった方が私はいいと思います。利便性の上ではそうですけれど、一方、私たち理系の者は、本そのものはほとんどいらぬわけですね。本の中に書いてある情報が必要なわけです。もちろん、例えば初版本なんていうものがよく皆さん蔵書で持っておられる方がおられると思いますけれども、それはまた、別の観点で価値があるわけがありますけれども、内容だけ、情報だけだったらほとんど本そのものはいらぬということになるわけです。もしそうでしたら、その中の内容をデジタル化してデータベースとして、今発達していますネットワークを使って読めばそれで良からうというふうになるわけです。全文データベースなんていうものは、確かにこれから出てくる印刷物については、できそうですけれども、過去の膨大な情報を全文データベース化することは大変なことだと思います。ですから、私は蔵書として本そのものを蓄積し、保管し、閲覧させるものは、どういうふうなものか分類していったらいいというふうに考えるわけです。現在では、データベースは表題とか目次とか抄録とかそういった二次情報がほとんどですけれど、我々はやはり、論文の内容そのものの中身も知りたいわけで、もちろん一字一句までいらぬわけですが、文学の方では確かに表現の仕立て方で一字一句も大事かも知れませんが、私たちはどういうことを、どんな方法で、どんなふうにして、どんな結果を得たかということがわかればよいことです。ですけれど、一応一次データも必要であるということです。それから特にデジタルベース化して非常に良いものは、ディストリビューションの非常に悪い印刷物ですね。いわゆる灰色文献といわれているもの、まあそういうたぐいのもの、現在すでに印刷物であるものでデジタル化したら良いものそういうふうなものがあると思いますね。現在、図書館ではOPACなどでデジタル情報データサービスを行っておられます。今、金沢大学では、スタンドアロンのCD-ROMのデータサービスを行っていますが、ネットワークを通じて見られるのは、例えば、Medlineとかごく一部しかないわけです。これから将来入手予定のデータベースは、

全部ネットワークを通じて見られるようにしていただきたい。ネットワークというのは、学内だけでなく地域社会や国内外の情報を実際そこに行かなくても入手できるという、非常に極めて利便性の高いシステムですので、これは今、各大学の、あるいは学情センターの、あるいは業者などのデータベースをインターネットを通じて検索できるようになっているわけです。私どもも、ネットワークを通して情報を入手しております。ネットワークというのは、こういうふうな情報入手するという能力だけでなく、一方では自分の情報を外に発信できるというもう一つの側面があるわけです。従って情報を得ることもでき、発信することもできるという、そういう非常に高機能のネットワークというものは、これからやはり大学として、あるいは図書館として使わないでおくわけにはいかないと思うわけです。先ほどもネットワークを使うと図書館情報の検索等が非常に便利になるという永田先生のお話もありましたけれども、私は情報処理センター長としての立場としては、やはり金沢大学の存在を世間にアピールするということが非常に大事だと思いますね。この大学には、もちろん図書館だけでなく非常に多くの情報が充々ているわけですね。紀要に書かれた論文とか研究報告、大学案内、大学白書からシラバス、研究業績資料、募集要項等、ほんとうにたくさんな情報があるわけですが、こういうふうなものはほとんど流通性の低い印刷物でしか提供されていない。ですからそれを持っている人しかそういうことを知らないわけです。私ども、例えば理学部については分かりますけれども、他の学部の先生方がどんなことをされているか、どういう形で授業・教育をやっておられるか、そんなことは全然分からない。そこでその白書などを手にすれば分かりますけれども、なかなかそういうことが手に入らない状況であります。こういうふうなものは、情報を全部デジタル化してインターネットを通じて大学から世界へ発信するということが非常に大事に思うわけです。これはやはり、金沢大学としての大きな事業にすべきだと思います。WWWサーバによって金沢大学の情報を発信するということが今、金沢大学としてはまだやっていないわけです。総合情報処理センターとしての、サーバのホームページに作ってあります。その中には大学紹介、学部紹介を試験的に入れておりました。こういうふうな扱い方、こんなふうな活用の仕方がありますよというわけで、今テストケースとしてやっております。自主的に先生方がデータを入れておられます。あるいはセンターでは、すでに公

になっているいくつかのパンフレットを、イメージスキャナで入力したり、もちろんキャラクターのところはセンターの人たちによってデータを入れたりして、WWWサーバというものはこんなふうなものだとのPRをしているわけですが、なかなか皆さんに使ってもらえない。有効性がまだ皆さんに分かってもらえていない。それと最近では私たちの分野で、論文の印刷物になる前のプレプリントが全部インターネットで出回っております。それから現在のプレプリントでなくても、現在投稿しているもの、また、雑誌にアクセスされていないものでもデータベースに入れて外へ出している。そういうふうなものが横行して、横行しては変ですけども、あっち行ったりこっち行ったりして研究のプライオリティを競っているというのが今の現状であります。そこまでしなければいけないのかということは別にして、雑誌に印刷しているものを読んでいるようでは、すでに遅れているという状況になっている部門もあります。ですからデジタルライブラリー、バーチャルライブラリー、ひょつとしたらユニバーシティープレスというもののデジタル版のユニバーシティープレスが見えてくるんではないかとわたしは思っています。図書館の将来像としましては、書籍による情報提供のみでなく、やはり図書館システムのデジタル化はもちろん、大学としての情報発信の拠点となるようになっていただきたいと思うわけです。そうしましたら情報のオープン化もできますし、共有化もできます。ですから、ある部局で作ったデータも他の部局でもすぐ使えるわけです。印刷できるようなデジタル情報になっているわけですが、それは共有物となっただけではないわけです。理学部の中でも共有物になっていないのです。ですから、そういうのは非常におかしいわけで、せつかく作ったデータというものはやはりディストリビューションをちゃんとしないといけない。そうしないと本とっしょになってしまいます。そういうふうな情報通信のルートはできており、まあ、手前みそでなにですけど、総合情報処理センターは、こういう環境を構築し、学内に利便性を支援しております。そこでやはり、現在の金沢大学の統合情報ネットワークというものを十分に活用していただきたいのです。さらに情報流通環境の整備というものは、学術情報の支援とか教育の支援とかそういうふうなものは単に図書館だけ総合情報処理センターだけが行うものでなく、やはり大学全体として行うべき事業だと思うわけです。図書館と総合情報処理センターとが手を取り合いまして、情報化の社会における

情報環境，レジュメに書いてありますけれど「デジタル情報流通環境整備運用機構」あるいは、「メディアセンター」なるものを構築するように皆さんは，もちろん，学長先生が中心になってやっていただきたいというふうに思っている次第であります。まあ，勝手な考えをしておりますけれども，実際，もうすでに図書館と総合情報処理センターとがうまくタイアップしてやっておられ，将来「メディアセンター」としても発展するような方向を打ち出している大学もいくつかございます。ですから，金沢大学もそういう流れに乗り遅れないようにしなければならぬと思っております。以上本当に勝手な雑ばくな話で失礼しました。

私の研究室に来ていただければ，いくらでもお見せいたしますし，この間理学部の一般開放をやりました時に，WWWサーバを皆さん来られた人々に見てもらったら，非常に関心を持っておられ，子供さんたち高校生が，そこから動かないんです。次から次へとくるくと，いろいろな大学，いろいろな学校，小学校あり，中学校もあり，もちろん，政府機関もあり，業者もあり，いろいろなところのいろいろな情報があつという間に手に入るのので，こういうデジタル情報というものはディストリビューションが非常に良いわけです。もちろんコンピュータがないと困るわけですが，ホームページをあけると，その中にはいろいろな情報が見られます。例えば，こういうふうにして，ここから北国新聞社の北国新聞を見ることができますし，日本の天気とか，Jリーグ情報とか，それから世界各国のいろいろなサーバが直接見られます。それから先端大学にも入れますし，これは無断で持ってきたんですけど，金沢大学工学部附属の電磁波制御実験施設という施設のホームページです。これを開きますとこういうふうな絵がでてきて，それでこういうふうなメニューがあつて，ここでどんな人がいて，どんなことをやっているかというふうなことがわかって，すぐ情報が見られることになっています。こういうような情報は，私の研究室の学生でも簡単に作ってしまいます。そんなに難しい形のソフトではないので，学生でも，初めてコンピュータをやった学生でも簡単にできますので，ポテンシャルは高くないのです。このようなホームページのリストは，例えば，この本は百校プロジェクトと言って小，中，高の学校にインターネットを経験する特に全国の百校に機器を配分してプロジェクトを作ったものですが，これは通産省がお金を出したのですけれども，その百校のWWWサーバガイドです。ここの中にどんな機関で，どんなホームペー

ジがあって、どんなサービスができるという本ですけれど、この本もちゃんとCD-ROM化されております。記載されているものは、大学、学校関係、あるいは一部政府機関、あるいは一部の企業ですけれども、このようなサーバのガイド、アドレス帳というのは、イエローページという世界のデータベースがあります。ロンドン大学に入ろうと思えばロンドン大学にも入れ大学案内などが見られますし、非常に便利なものです。

#### 【司会】

野田先生でございますが、立教大学大学院文学研究科を終了後、札幌学院大学助教授などを経て、昭和62年、本学教育学部助教授にご就任になり、今日に至っております。ご専攻はアメリカ文学で、多くの論文・著書の中でも、特に19世紀のアメリカの女流詩人エミリー・ディキンソンに関するものが目をひきました。実は、昨年行われた学長と若手教官との意見交換会での発言を踏まえて作成された「金沢大学の将来に対する提言」の中で、先生は『文化施設としての大学』と『大学コミュニティの充実』の二点を特に強調されております。図書館についても、『身近な大学図書館のありかたを通じて、文化施設としての大学の存在を考える』ということで提言をされました。また、先生は私学にも在籍されておりましたので、国立大学図書館の閉鎖性・収書の恣意性を厳しく指摘いただいております。今日はその第二弾として、また、ご提言をいただければと思います。

#### 【金沢大学教育学部助教授 野田研一】

野田でございます。別に第二弾を期したわけではなく、また門外感ですので決して系統的に、あるいは歴史的に図書館のことを考えているということではありません。非常に個人的なレベルで自分が研究したり教育したりする場面で図書館について日頃感じていることを、何となく言ってしまったということで、大変失礼なことを多々申し上げたかなというふうに思っております。

今までのお話はまさにデジタル的な発想のお話で、おそらく、図書館というものは情報化と言いますか、デジタル化ということを通して変質していく、あるいは再定義しなければいけないというそういう時期にさしかかっているんだな、ということを感じました。そういう意味でこのシンポジウムは、大きな意味があ



るなというふうに感じます。私自身はアナログ型で、一応パソコンを使っていますが、あまり発展性のない使い方をいつもしておりまして、文科系でしかも文学という人間ですので、一種の片寄りもあるかと思えますけれどもご容赦願いたいと思います。ちなみに私が利用する主な図書館、今というか、あるいはこれまで利用した図書館というのは、大学図書館、それに当然ですが、金沢ですと市立図書館を割とよく使うと申しますかよく出かけます。それから、研究上では他大学の図書館とかそれから比較的便利にしているのは、アメリカのことをやっておりますので、アメリカンセンターというのが日本中にありまして、その図書館ですね。そこはかなりオンライン化がきちんとされていまして、アメリカ関係のことを調べるには非常に便利な施設なので、利用させていただくことが多いですね。それから図書館経験で言いますと、学生時代に過ごした図書館もそうでしょうし、それからアメリカで1年間過ごした時の図書館、そんなことがだいたい私の頭の中にあって、そこから発想しているということです。先ほど申し上げましたように文科系の文学の人間ですから、基本的に本が対象となります。最近横書きの小説というのが出て話題になってはいますが、基本的には縦書きのとてもコンピュータには馴染まない感じの世界であると思うんですが、その本を基本的な研究対象として、あるいは資料としてやっておりますので、本がないと生きられないというそういう領域の人間からの素朴な感想ということでご容赦願いたいと思います。

そこで、あたりまえのことを言っているのですが、文化施設としての大学であるだろうし、図書館であるだろうというのが基本的にあるイメージです。そんなイメージの中にあるのは、例えば、博物館とか、美術館とか、コンサートホールですね。そういったものと似たイメージです。それぞれの役割がありますがけれども、言ってみれば、類似したイメージでとらえていくといいのかな、というふうに考えております。ただし、もちろん大学のような研究教育機関とそれから、その他の公共図書館とではちょっと性格が異なる面があるかと思えますけれども、そのような意味で文化的施設としての図書館というイメージを基本的にしていきます。そこではおそらく何がなされるんだろうと考えますと、あてずっぽうですみませんが文化的な財と言いますか、それを蓄積することと、それから文化的財に対する目を開かせる教育的な役割を果たす、この二つが基本的にはあるのかなと

思います。ちなみに、発言要旨として皆さんの手元にあるものは後のほうで若干触れまして、むしろ前段のところをここでお話したいと思います。

そこで、文化施設としての図書館として最初に念頭に浮かびますことは、物理的な条件の問題ですね。ただこれは詳しいことを分析的に言えるというわけではありませんので、むしろ、お考えをお持ちの方がいらっしゃいましたらこのシンポジウムの中でもまた何かやりとりができ、ご意見を伺うことができればと思います。物理的条件とは何かと申しますと、この角間キャンパスの中の、今ある図書館の位置というのは適切な位置なのか、つまり、キャンパス内の交通体系のようなものがあると思います。当然あると思いますが、その何処に位置していて、それが、キャンパスに暮らしている人間にとっての動線としてうまく適合しているものだろうかということです。だろうかということは、若干の疑念を持っているというふうにもとれると思いますけれども、設計上の問題も含めてこういう物理的条件がキャンパス構想の中でどのように考えられたのかな、ということが私には分からないまま疑問の形で提示して見たいと思います。この物理的条件というのはかなり大きい、つまり、大学というのをコミュニティと考えますとその中で何処に位置するかというのは当然のことですけれど、非常に大きな問題をはらんでいるだろうという気がいたしますので、何かお考えがありましたら、むしろ何かお聞かせいただきたいと思います。

次にこれは私の具体的なイメージの問題ですが、一言で言いますと図書館というのは、ある種の楽しい空間であると思いたいわけですね。これも美術館とか、博物館とか、コンサートホールでもいいですけど、そういうものとのアナロジーで考えますと、図書館の快樂というものも、快樂とは変な言葉ですが、研究者として暮らしていると一度くらいは味わうものだと思います。その快樂の中身は實際上いろいろあると思いますが、まあ探しあぐねていた文献情報を、ひよいと見出すということ、あるいはあちこちと探し歩いていた上に出会ってしまうというような、そういう快樂が当然ありますね。これは普通の書店ではあり得ないことが起きるという意味での快樂です。それから二番目には、中断されることなくものを書いたりすることができる時間と空間をもたらしてくれる。中断がないという状態は、決して、研究室へ押し寄せてくる電話とか、雑用とかから逃れられるという意味だけでなく、むしろ、考えたいことや気になっていることを館内

にある書物で次々に調べていくことで、持続的な思考をもたらすことができるということです。つまり、「知的な刺激」という言葉で言っているのかもしれませんが。あたり前かもしれませんが。第三に考えられるのは、書物を財として考えた時に当然出てくるエクジビションですね、つまり、展示する、見せる、見るということも大事な快樂の一つではないかと。私は書物マニアではありませんけれども、先日石川県の近代文学館で、渋澤龍彦という書物マニア（ビブリオマニア）の展覧会がありましたけれども、書物というのは単なる情報メディアではない。それとは別なものもある。あるいは書物それ自体が価値を持つということがあり得ますので、先ほどからお話のように電子情報としての図書館ももちろん必要なわけですが、それだけの世界にはもちろんなるべきではないし、なることもないだろうと思って楽観しておりますが、ただ、その書物を見る楽しみだとか、本という何と言いましょか、それは文字としての情報的な価値ではなくて、それ自体の物理的な、物質的な存在の価値というか、そういうものもかなり私は関心がありまして、そういう価値も大事にしていきたいし、それからそれも一つの快樂であると思います。そういう意味では、書物の情報的な読み方と、それから書物それ自体を読む読み方に図書館そのものが二分化されて行くのではないかと、先ほど須原先生のお話の中にそういうお話があったかと思っておりますけれども、将来的に図書館の再定義ということがあり得るとすれば、その問題が当然出てくるのではないかという気がします。それから第四に、図書館という空間それ自体が提供する楽しさというもの、どうも私は快樂を追求するんですが、図書館がきわめて限定的にならざるを得ないとしても、一種の社交の場として機能する必要もあるのではないかと思います。書物とか、あるいは、情報を介して人や集団が交流するという場というふうになっていいのではないか、もっとなっているのではないかという感じがします。もちろん、うるさいというところもあるかと思っております。

今、四点ほどあげましたけれども、言わば、こういう図書館の快樂というか、そういうものを正直言いまして味わいましたのは、アメリカの大学図書館だけでした。経験から申しますと、そもそも図書館というものは、何となく気を使うような、あるいは禁欲的なようなそんな雰囲気があつて、私自身は、わりあい近付きにくい世界だともとも思っていた人間ですけれども、それがこんなに楽しい空間であるかということを知ったことが、私自身にとっても大きかったと思

います。つまり図書館の役割の中に確かに考えたり、情報を得たり、勉強をしたりという、ある目的に向かっていくための設備という条件もあると思いますが、もう一つは、ちょっと遊びに近い、つまり、逸脱しながら思いがけないものに出会ってしまうという、まあ、そういう森の中を散歩するみたいな面もあってもいいのではないかというふうに思います。コンピュータの中であっちこっち行っている間にどこかひよんな所へ出てしまうということもありますので、コンピュータがその遊びを全て排除してしまうわけではむしろないと思いますけれども、そういう遊びの要素というか、逸脱的、合理的でない側面というものそれ自体が楽しみというか、あるいは快楽的という形で考えたいというふうに思っております。ちょっと余談的な話題で恐縮ですが、大学の中で一応研究者として暮らしていて、ひそかに願望していることというのを申し上げたいと思います。それは研究室から情報的な価値しかない書物は全て放逐するということです。文科系の人間というのは書物との付き合いが当然多いわけで、書物が増えるだけで減るということはない状況です。私の研究室の場合は、散乱しているという状況と言ってもいいと思うんですけれども、これもアメリカの場合、割方経験したことでご存知の方もいらっしゃると思いますが、アメリカの先生というのはあまり本を持っていないんですね。少なくとも私のようなアメリカ文学の分野の先生たちと付き合っていて本を持っていないことを非常に不思議に感じました。研究室に行ってもそれほど本があるわけではありません。我が国では文科系の先生はびっしり本を抱えています。アメリカではそんなことはないのです。それからアメリカでは自宅でもコレクション的、稀覯本といいますか、そういうものは持っていますけれども、いわゆる論文とか研究書とかいった類のものは置いてないのです。これは何故だろうと話をしてみると、結局、図書館で賄えるということなのですね。もちろんアメリカ文学とは、アメリカにとっては国文学ですから、一番充実した分野の一つであるのかも知れません。けれども図書館で仕事ができるという答えを聞いたときは、それは一種の驚きで、本という宿命的に自分の周りにくっついてくるものを払いのけたいと思っている人間にとっては、羨ましい世界だったと思います。そこがつまり、図書館というものが、特に大学図書館というものが、具体的にもう一つ突き抜ける形で果たしてもらえたらいいなと願望している点です。先ほど申し上げたように、情報的な価値の対象としての情報とか書物ですね、

そういうものは図書館で可能な限り抱え込んで、それで私たちがそこへ出かけていけば仕事ができるという環境です。まあ、実際、大学図書館で仕事をしている大学教師は、アメリカの場合かなり多いと思います。極端に言えば、自分の書斎もいないし、研究室もいないということがあるかどうかわかりませんが、そんなふうなことを考えていたわけです。

そこでちょっと、いささか快樂に走りすぎた図書館についての話なんですけど、発言要旨として提示しています中に、できれば先程私が理想としている、図書館で仕事ができる、かなりの仕事がそこでこなしてしまえるというような状況が生まれるための環境作りという観点と、それから教育に配慮した図書の充実という観点を含めて、収書に関して二つほど書いておきました。一つは学生用基本図書の整備ということですね。これは以前に私立大学におりました時に、やはり授業にできるだけ対応させて図書を揃えるというやりかたを、これは小さな大学でしたから小回りが利いたという面もありますけれども、重視しておりましたのでその点で言いますと、学生に授業の中で紹介したり言及したり、リストアップしたりするというような本が必ずしもすぐに見つからない、あるいはない。あるいはこんなものをシリーズとして学生用に置いといてほしいものが必ずしもない。そういう状況がありますので、これはどういう形で実現することができるのか、あるいは一定程度実現可能な状態になっているのかも知れませんが、こういう観点もあり得るということです。それから二番目は、全学的な収書方針で、これに関しては別の機会で発言させていただいた時に、実際にはこういうことができるはずだというふうなご意見も伺ったこともありますけれども、結局図書館が主導になった収書の仕方というものがあっていいのではないかというふうに思っています。つまり、全体的な視点から、もちろん個別的な分野の非常に細かいところでは専門的な先生方がたくさんいらっしゃるわけですから、そういうところから出てくるのも必要なものはたくさんありますけれども、それと同時に、全体的な視点で大学、あるいは大学生にとっての必要性から適切な判断を下して、なおかつそこに予算が一定程度投下できるという、そういう状況も必要かなというふうに思っております。それからもう一つコレクションですね。金沢大学ならではのコレクション、すでにもあるものもありますけれども、そういうものを充実させて行く方向もぜひ考えていただけたらなと思っております。

とりとめない話で恐縮ですが、文化施設としての図書館という大学図書館のイメージから、いろいろな楽しいことができる場としての図書館を構想してみたいなというお話を申し上げた次第です。

#### 【司会・小堀図書館長】

どうもありがとうございました。私自身が申し上げたいことをずいぶん言っていただきました。後ほどのディスカッションでぜひ皆様方のご意見をお伺いしたいと思います。また、本学では自然科学系図書館を現在、工・薬・がん研究所が移転してきます第二期に計画をいたしております。その時の物理的配置位置等もございますし、昨今、金沢市の都心部の空洞化、すなわち、金沢大学が引っ越ししました後の金沢城跡、県庁跡地、広坂の問題等で図書館の話も出たり、そういうこともふまえて、後ほどのディスカッションの時に皆様のご意見を、また、パネリストの方たちのご意見もお聞きしたいと思います。ちょうど3時でございますので、ここでコーヒータイトムをとりたいと思います。その前にちょっとコマーシャルを差し上げまして、皆様のお手元のところへ、こういう「金沢大学附属図書館概要」が届いていると思いますが、これは、刷り上がったばかりでございます。おそらく皆様方が最初におとりいただいたもので、まずこの表紙から見ていただきまして、苦勞したところでございますが、約15分ほど休憩いたしますので、その間にごらんいただければ幸いです。

#### 【司会】

では、時間もまいりましたのでつづきさせていただきますと思います。

次は、金沢大学留学生センターの教授でございます八重澤先生にお話をお願いしたいと思います。

八重澤先生は、現在本学の留学生センターの教授でございます。その前は、留学生教育センターのカウンセラーとして、その後平成3年に工学部に設置されました留学生担当の講師をされ、今年4月、留学生センター発足と共に教授に就任されました。先生のご専門は発達心理学でございます。日頃留学生と接しておられまして留学生教育の課題に関しての修学、特に生活面でも何かとお世話をされておられまして、そういう先生には特に国際時代にむけて、留学生を通じての図

書館のあり方のご提言をいただければと思っております。

【金沢大学留学生センター教授 八重澤美知子】

八重澤でございます。フロアの方がたくさんいらっしゃいますが、その中には直接に留学生と図書館で接して下さったり、あるいは、もっと間接的に物心両面から援助して下さっている方のお顔がちらほら見えまして、この場をお借りして感謝申し上げさせていただきたいと思っております。

先ほどからお話を伺っておりまして、永田先生、須原先生は非常に先端的な図書館の転換期ともいべきお話をしていただきまして、大変刺激されました。そして、野田先生の方は全般的な、もっと図書館は楽しいものじゃないだろうかというようなお話をしていただきました。私のところになりますと、ぐっと特殊な、現在金沢大学では、平成7年5月の統計ですと10,157名の日本人学生が学んでいる。しかしその一方で留学生は245名であるという、特殊なところのお話をさせていただくわけで、ちょっと気が引けますけれども、もしかしたらこれは日本の図書館の発展過程のある一時期のことを言っているのではないかと考えられますので、その辺をお話させていただきたいと思っております。

書物と私たちとの関わり、学生ということのみてみますと三段階あると思うんです。私自身が経験したことなんですけれども、心理学を勉強していた学生の頃、と言いますのはかれこれ20年前で、1970年代でございますけれども、その頃に私の担当教官のところへ行って、「今日先生がお話しされた内容についての、良い本について紹介して欲しい」と言ったところ怒られたんです。何故かという、「君はよくそんなことを聞けるね。僕たちの学生の頃は恥ずかしくてそういうことは教師に聞けなかったものだ」というふうに怒られたんです。そんなものかな」と大変ショックを受けましたけれども、その頃、私が教育を受けた1970年頃、それによりもっと20年くらい前の時期には、例えば心理学ならばある種のスタンダードな書物は決まっていたと。その頃、学生はだいたいそれだけ勉強すれば一応事は足りたという時代だったのかなあという気がします。次く私たちの時代はどうしたかと言いますと、参考文献、原典にあたりまして、それを自分で調べてもっと一歩進んだことを先回りして勉強し、教師をぎゃふんと言わせてやろうと生意気にも思った世代、これが第二段階です。第三世代では私が教師

になりまして、さまざまな資料を作り学生に配りまして、「読んでおきなさい。」それで、どのくらい読んだかなというのをとても心配している段階になりました。確実に第三段階に至るまで書物というのはずっと増え続けている一方ですね。第三段階ではむしろ教師は溢れている情報の中からどのようにして情報を選択してやっていったらいいんだろうかということをお教えしなければいけない。これは私だけの分野ですから、ほかの分野ではどの程度通用するかわかりませんが、そんなふうに考えています。その第三段階から振り返ってみますと、留学生の置かれている時代は第二段階なんですね。参考文献や原文を自分自身で模索し、探し出して勉強する段階だと大雑把に私は思っているのです。そうしますと今日のテーマ、「留学生の学習支援の観点より」を見ますと、留学生はどんなふうに図書館に期待し、あるいは利用しているのだろうか。その期待や利用の背景にあるニーズというものはどんなものだろうかということについて、非常に偏った狭い領域ですけれどもお話させていただきたいと思います。これはあくまでも留学生の生の声をひろいましたのでひょっとしたら偏りを生じたり、あるいは不都合をかけるところがあるかもしれませんので、そこのお許しください。私の近辺の極めて少ないデータだと思っています。

まず最初に、金沢大学で学ぶ留学生のプロフィールを分けて提示したのは、それぞれのタイプによって図書館に対するニーズが違うんですね。ですから、これこそが留学生と図書館の関係を明らかにするという、モデルケースをなかなか選べないですが、敢えて選ぶとするとどうなるかというのをちょっとここで出して見たかったんです。ご存知のように私たちの大学では留学生センターが出来まして、センターは留学生の予備教育を始めとしまして、さまざまなことをやりますが、当然そこにはさまざまなタイプの留学生達がおります。一口に留学生と言いましても、まず、経済的な裏付けや、授業料においても特典がありますところの国費留学生がおります。研究留学生と言いますのは大学院に入る学生です。これは各地の大使館推薦の留学生と、それから私どもの大学推薦の大学院生の二種類がありますが、非常に数は少ないです。それから国費の学部留学生、教員研修留学生、日本語・日本文化研修留学生、教員と日本語・日本文化研修留学生、日研生と呼びますが、これはだいたい一年以内で短期ですね。この方たちの図書館の利用の仕方と言いますのは、上記二つのものとは違っています。それは期間が



短いということもあるのですが、主に教員とか日研生というタイプの留学生は、日本をフィールドワークとして研究するためにやって来ますので、日本語の原典と言ってもニーズにいろいろばらつきがあります。この人達についての経済的裏付けにつきましては、先ほど申しましたようにしっかりとできていて、私たちはあまり心配していませんから、純粹に学問的な見地からの指導が望まれます。研究留学生、学部留学生の場合は、単位の取得と関係してまいりますから、この層は基本的には図書館を大いに利用する層だと思っていただいて結構です。それから、外国政府派遣留学生、これはほとんどが学部全てです。外国政府が奨学金を出して、私どもの大学に来て学位を取って帰って行く。現在では東南アジアの、主として理系の、特に工学系ではマレーシア・インドネシアの留学生を多く受け入れており、全員が学部生です。彼らは長期に渡って滞在しますから、四年、五年、六年、あるいは、大学院に進むものもいますから、それ以上ということで、本が必要な人達です。その他を占める多くが私費留学生です。これは先ほどの国費留学生と同様に大学院に学ぶ研究留学生、それから学部で勉強する学部留学生ですが、この人達の図書館に対するニーズは国費留学の研究留学生、学部留学生と基本的には同じです。ですから、多くの留学生が図書館に期待する状況にあります。各々学部によっても、あるいは専門分野によってもニーズが多少違ってきます。

ちょっと紙面から離れますけれども、一般に私どもの国では21世紀初頭までに「留学生受入れ10万人計画」と言っていますが、平成7年5月現在の統計ですともう5万3千人を超えております。日本全体の統計ですと、そのうち91パーセントがアジアです。私どもの大学では83パーセントくらいがアジアですから、まあ、だいたい日本全体の留学生事情と似ている。それから私たちの大学の245名のうちの半数は中国であるということですね。次に多いのが韓国、マレーシアということで、東南アジアの学生達がそこに続きます。学部別で見ますと、産業構造の転換ということで、それは私たちの歴史を振り返ればいいことですが、工業国への脱皮という基本的にはものを作る学部、工学部に沢山のアジア系の留学生達が在籍して先生方の指導を仰いでいる。これらの留学生が三分の一とすると、残りの三分の一はジャパンマネーのところの経済学部、あるいは法学部、あとの三分の一は、日本にフィールドワークにくる。ですから、留学生と

一言で言っても、おそらく各学部の中に設置された図書館に対するニーズがだいぶ違うんじゃないだろうか、そのなかで数として多い、留学生のモデルケースといっても変なんですけど、工学系で、アジア系で比較的長期にわたる留学生を念頭に置いていただいて、以下の留学生のニーズあるいは留学生から図書館への要望などについてちょっと見てみたいと思います。まず、留学生のニーズと図書館への期待、これは裏と表ですね。所属学部、専攻別、留学目的などの違いがありますが、図書館に対していろいろな要求を言ってくるのが一般的には理系でありまして、学位の取得を狙っており、従って長期に渡って日本に住んでいる、私費の留学生ということになります。工学部の図書館で働いておられた方たちは、留学生はいちいち色々なことを言ってくるというふうにお考えでしょうけれども、それは基本的に彼らは自分で文献に当たりたい、自分で文献を探したいという熱意の表れという面もあるとお考えいただくと大変ありがたい。それから、漢字圏なんですけど、先ほどアジアが83パーセントで中国が128人、韓国が24人くらいですが、そうすると両方あわせて150を超えてしまう。それでも彼らの欲求は、理系が多いということもありますが、英語で書かれた書物が少ないということもいつも言っています。この辺は、日本人の学生は待っていればすぐ翻訳が出るわけですね。もう、待っていれば誰か訳してくれるから、というのがある程度通説になっている。どうしてあんなに翻訳本ばかり出るのだろうと留学生が困っているんです。日本人の言語能力も関係あるのかと思ったりしているのですけれども、とにかく英語で書かれている原文に当たりたいと、原書が少ないと、理系の留学生達はよく私の所に言って来ます。それは漢字圏の留学生が多いのだから日本語は読めるだろう、彼らは確かに読めるのだけれども、もっと原典に当たりたいという気持があり、これは日本人も同じだろうと思います。それから日本に来る前のカリキュラムの違いという項目ですが、これは研究留学生・学部留学生ともありますが、多く聞かれるのが外国政府派遣留学生なんですね。日本の学問が進んでいる、進んでいるから来日するわけなんですけど、必然的に自分の国では学べなかった領域を既に日本ではやっちゃっていると。その種の悩みを抱える多くは理系なんですね。つまり、一旦足を踏み外しますとそれ以降の内容がわからなくなってしまうということがあるんです。私は先ほど図書館長から紹介していただきましたように、3年10か月間工学部におりまして、カリキュラムに関

して教えていただいたことは、工学系の概論というのは、A先生がおやりになってもB先生がおやりになってもC先生がおやりになっても学習の到達度はそれほど変わりがないと、裏を返せば、それだけ工学部のカリキュラムはしっかりしている訳で、途中で足を踏み外したり、自国で全然学習していない領域に出会った場合、それ以降の学習がだめになってしまう。ということは、もう・基本的・基礎的な本が必要であるということになる。たまたまある先生が、「留学生の○○さんはsinとcosはやっているんだけど、tangentはやっていないんだよ」と。たぶん私は冗談だと思うんですけども、大袈裟に言えばそのくらいのことがあり得るんだということなんです。あともう一つカリキュラムの違いに関連して基本的な書物がないということを担当の指導教官には言わないんです。留学生は個人なのですが、一部の人の中には国を背負って来ているというところがあります。そんなに気負うことはないんじゃないかと私は思うんですけども、例えば集合時間にある国の留学生が遅れて来る。すると、来ていた留学生が「ほんとに僕の国に失望したでしょう。」という。それは遅れてきたその人の問題でしょう。」と言うのですが、自分の国を代表しているように身構えるところがある。せつかく留学に来たのだから、指導の先生方にマイナスの点を知られるのが怖い、ということではなかなか言わないんですね。私のような門外漢のカウンセラーに、あるいは図書館の方に基本的な書物、日本人の学生ならどうしてもそんなものを買わなくちゃいけないのか、というような初歩的な、英語で書かれた書物の要求を私は工学部に行った最初の2年間ずっと聞く羽目になりました。

あと、日本語関係の書物なんですけど、敬語の使い方の辞典が欲しいとか、日本の先生方が聞いたらよくぞそんなことを言ってくれる学生がいたなどと思うくらいのことを時々留学生は言ってくる。それくらい意欲的な学生もいますが、最近の留学生の傾向として、経済的なものに対する感覚が日本と日本以外の文化と少し違うせいかも知れませんが、例えば異文化に行ったら、そこで生活して行くためにどうしても必要なものを買いますね。だいたい日本人なら思うわけです。例えば辞典を買うとか。しかし、彼らは買わないで図書館で買うように要求するんですね。図書館の方がその対応を私に聞いてこられるものですから、「留学生には辞書ぐらいは買うように、自分の手元において勉強するように進めてください」と答えます。しかし、彼らはおそらく言うだけ言ってみたのではないかと、ま

ずは要求してみるとという文化的な基準がある国から来ている学生もいますからね。

しかしながら、留学生も最近次第に世代交代をして、かなり若い世代も来ています。30代留学生から20代の留学生を見ると、今の若い人は全く分からないというんですね。同じ国の人達です。なんでわからないのかと聞くと、日本で学習するための書物を買わない。他人の本のコピーばかり取る。私の部屋の隣はコピー室なんですけど、日本の学生も本を買わないで一冊ぐらいコピーしているんですけど、そのうち留学生まで始めちゃったんですね。いいところを学習しないで自分たちに便利なところだけ適当に真似するのかな、ああいう習慣は好ましくないのんじゃないかと思いつつ見ておりますけれども。そんなふうには、以前の留学生とタイプが違って来た。5万3千人も来日しているのですから、いろいろなパターンが出てくるでしょう。また、その人達の出身国も国力が付いて来るとだいぶ違ったタイプの学生達になってくるのかな、ということを感じたりしています。

短くまとめる予定でしたが、これからお話をさせていただくのは出身国の図書館事情ということで、先ほどからずっと引き続いて申し上げている留学生の大半を占める、韓国や中国の学生の話を紹介したいと思います。図書館の利用度というのはその社会、つまり、学生を取り巻く社会環境とは無縁でないわけですね。従って彼らの国の事情が、そっくりそのまま日本には当てはまるわけではない。つまり、そこにはいくつかのハードルを考慮したうえで考えてみなければいけないという点がありますが、いろいろと面白いコト

を語ってくれました。両方とも日本の図書館の事情が非常に良く分かる学生です。というのは、幸いなことにこの韓国と中国の学生達は、図書館でアルバイトをさせていただくという大変ラッキーな機会にも恵まれました。彼らの意見ですと、「どうして日本人は図書館を利用しないのだろうか」ということなんですね。

「だいたいいつも留学生ばかりが利用していますよ」という意見なんですね。彼らが言うのは中国・韓国共に一日のほとんどの時間、図書館はやっている。韓国ではほとんど24時間営業なんだそうです。貸出しの時間には制限がありますがけれども、勉強する場としての図書館はずっと開いていると。中国も大体似たようなものだそうです。一週間、韓国で図書館を24時間開館体制をとらなかった時、学生達から文句が出て、またオープンせざるを得なくなったと。ほとんど毎日図書館に行っていて、中にはそこで暮らす人がいるから、その人に会うと変なニオ

イがする、という話まで飛び出しまして、随分様々だなと。図書館に場所を確保するのに朝の6時では遅くて、5時に図書館に行って席を確保してそれから授業に出ると。このくらい熱烈歓迎されたら図書館もいいなと思いますけれども、それは、社会全体の中で図書館の担う役割と関係しますから、そう簡単に日本に移行できることではないかも知れません。

あと、もう一つの問題は、基本的には図書館に原書を多くして欲しい、どうも古いものが多い。韓国の学生はまず韓国に行くことやることがある。何をするかというと、英語の書物をたくさん買って日本に持ち帰ることだ、ということを知って私はショックを受けました。いろいろなことを申し上げましたけれども、図書の方は、留学生が書物を探すときに時間をとられてしまうのではないかと思います。このあたりは私どもの留学生センターと提携しまして、借り方、貸し方、検索の仕方等々について図書館のオリエンテーションプログラムをしっかりと整備して行かなければいけない段階だろうと思っております。

#### 【司会】

どうもありがとうございました。私どもが気が付かない点につきまして、いろいろセンターの立場からお話いただきました。まず、日本人はどうして図書館を利用しないのかというところで、また、これからあとのところでお話したいと思っております。留学生につきましては、図書館の方で留学生コーナーを作りまして、留学生センター及び学生部、そういった全学的に補助をいただいて辞典等を揃えています。それからまた、金沢市内にあります財団2つから、外国の新聞の購読などということで補助をいただいております。なにぶんこれにつきましても、有償等の問題がございます。

では、最後になりましたけれども、県立図書館長の表館長にお話をお願いしたいと思っております。

館長さんは、中央大学法学部をご卒業後、民間会社を経て、石川県立図書館に入られ、昭和58年に資料課長、平成6年4月副館長、平成7年4月に館長にご就任されておられます。

図書館歴30年のベテランであり、専門職の館長として、名実ともに県内公共図書館をリードしているお立場から貴重なご提言をお願いします。また、県立図

書館と本学図書館とは非常に近くではございますが実際にはあまり往来がございません。特に、近年県立図書館はじめ、金沢市の市立図書館等近くとの連携、それは生涯学習社会に、非常に地域的な貢献をされているので私どもも見習うべき点が非常に多くありますので、その点も含めましてもお伺いしたいと考えております。

【石川県立図書館長 表 政直】

私は県立図書館に勤めて今年で30年目になりますが、公共図書館の立場として、石川県の公共図書館の地域的な事情についてお話をさせていただき、最後に大学図書館にお願いということも含めてお話をさせていただきたいと思います。

図書館に入りましたのが昭和41年の5月で、県立図書館が兼六園の中から本多町の社会教育会館に移転した時に入ったわけですが、そこはご承知のように図書館と社会教育センターとの複合施設で、図書館で良い本を読んでもらおうと、それから社会教育センターで良い講師を招いて良い話を聞いていただく、そういう機能を有機的に結びつけようという意図でつくられた建物でございますけれども、現実問題としては、図書館へ来られた方が社会教育センターのいろんな講座に参加なさることはありますが、社会教育センターの講座に参加された方が図書館に来られて図書館の本を読むということには結びついてはいないようで、どうも良い結果になっていないのではないかと考えています。また図書館サービスとしては、金沢市民の利用がほとんどで、直接サービスが中心であったわけでございます。

私は図書館で仕事をするようになった昭和41年の当時、司書の資格を持っておりませんでしたので、東洋大学の司書養成夏期講習に行きまして、2ヶ月間みっちり講習を受け、そこで司書資格を取ったのですが、その当時、日本の公共図書館が変わり始める一つの変わり目といたしますか、そういうきっかけになった図書館として注目されていたのが日野市の図書館でございまして、2ヶ月の講習の間に一日だけ休みがありましたので、ある方の紹介状をいただいて日野市長に面会し、市長公用車で日野市立図書館へ行きました。日野市立図書館というのは小さな事務室と一台の移動図書館しかありませんでした。日野市は東京の新興住宅地でベッドタウンのような所でしたので、市内各所に団地ができておりました。

それらの団地を中心に移動図書館で回りながら市民に貸出しサービスをやっていました。図書館は建物ではなく、貸出しやレファレンスサービスを通じて資料を提供するというのが公共図書館の本質であるとした、『中小都市における公共図書館の運営』、中小レポートとも言われる報告書が昭和38年に出ておりまして、日野市の図書館は前川恒雄さんという石川県出身の館長さんが、その中小レポートを実践しようと随分苦勞されて取り組んだわけです。それで、一台の移動図書館から始めた。中小レポートの基本的な考え方というのは、市民の最も身近にある市町村立図書館が中心ですと、公共図書館の中核は県立図書館ではなくて市町村立図書館ですと、資料の提供は貸出しを中心にしてという理念が盛り込まれたそういうレポートなんです。

ちょっと話は変わりますが、私が県立図書館に勤め始めてからずっと忘れられないことがあります。それは、昭和38年の図書館雑誌に寄稿された方の手紙、「県立図書館の友人へ」という2ページくらいの文章です。これは石川県の七尾市立図書館長をしておられた方が石川県立図書館長に宛てた手紙ですが、その手紙の内容をかいつまんで申し上げますと、県立図書館は今度立派な建物をつくろうとしている。しかし、そういう外見的に立派な建物だけでなく、県立図書館は県民の図書館として県内全域をサービス範囲とする奉仕体制を確立することが大切であり、そのため、県内の市町村立図書館への側面的な援助や助言を通じて、サービスを有機的に結びつける図書館プランというものを用意すべきである。そして、そういうプランを実践しないと県立図書館の役割は果たせませんよと。もう一つ、市町村立図書館でできない図書館機能として重要なのは、県内のインフォメーションセンターとしてレファレンスサービスの要請に応えること、以上の点が非常に大事だよと。そこで今県立図書館、これは昭和41年の話ですが、新しい建物をつくろうとしているわけだが、そういう県立図書館の理念が確立されているか、ということを書いておられたわけです。この当時、そういうことを言われたということは非常に優れたご意見だったわけですが、残念ながら先ほど申し上げたように、社会教育センターとの併設でスタートした県立図書館は、どちらかというと直接サービスを中心にやることに終始していたわけです。

それで、県内の公共図書館の事情に触れてみますと、県立図書館ができたのが明治45年1月ですが、その当時はほかに公共図書館はなく、県立図書館しかな

かったわけです。その当時の設立の趣旨というか県立図書館の性格を当時の館長はこんな表現の仕方をしてしますので、ちょっと読んで見ますと、「図書館には普通、参考、国立の3段階がある。普通図書館は通俗図書館と言ひ、主として普通教育課程程度の新知識と読書の娯楽を与え、参考図書館は一に高等図書館と言ひ、普通図書館の図書にては用を便ぜざるものの来館する所なるが故に.....中略.....石川県の土地の状況に照らして、以上の普通及び参考の二つを兼ね重きを普通に置く」とあります。ですから、その当時の県立図書館は直接サービス、いわば一般大衆的な性格を持ったものに重点を置いてスタートしたわけです。

その後、金沢市立図書館が昭和5年にできたわけですが、ある方にお聞きした話によりますと、この方は金沢市立図書館の設立時に強く関わった方ですが、貴重なコレクションが数多く現在金沢市立玉川図書館に収蔵されておりますが、そういう貴重なコレクションを収蔵するために金沢市立図書館をつくったのだと言っておられました。そんな意味では、県立図書館の性格と金沢市立図書館の性格は、県立図書館が市民図書館的な役割を果たし、金沢市立図書館が保存図書館的な役割を果たすという、今から言えば逆転したような関係が成り立っていたわけです。そんな関係は、昭和41年に県立図書館が新しくできたときも変わらなかったわけです。市立図書館が本来あるべき姿に変わり始めたのは、昭和54年に玉川図書館ができてからだと私は思っています。それまでは、他の市町村でもあちこちに図書館ができましたけれども、県立図書館をちょっと真似て小型にしたような図書館が多く、図書館同士の協力関係もなくてバラバラの形でサービスをやっていました。中小レポートのいう基本的な理念が浸透していなかったものですから、図書の購入予算もなかなか付かないし、貸出しも少ないという状態が長く続いたわけですが、玉川図書館ができ開放的な大開架図書室で貸出しを中心にサービスを始めた。その頃から県内の図書館事情は、少しずつ変わり始めたと思っております。最近では、皆さんもご承知のように4月2日に泉野図書館ができましたが、約1万㎡の図書館で開架図書が16万冊です。非常にすばらしい図書館で、新刊書が大変多いので、1日平均大体4-5千冊の本が貸出されていると聞いています。その間貸出しだけでなく、職員とお客様との間にこんな本が読みたいとかこんなことを知りたいとか、いろいろと質問や対話があると思っておりますが、そんなふうに、県内の各地で新しい図書館ができ、市民図書館としてどんどん利



用されるようになってきたという状況が各市町村で起こっています。

これに対応して、県立図書館は今までのあり方を変えなければいけない。さっきお話ししましたように、七尾の図書館長が38年当時におっしゃった理念が私はずっと忘れられなかったわけで、県立図書館はこうあるべきだと、それはどういうことかと言いますと、すべての県民が市町村立図書館を通じて県立図書館の資料を利用できるような体制づくりが必要だということです。資料を提供するための情報のシステムもそうですし、情報の提供だけでなく資料ももちろん要るわけです。年間に大体5万4千冊くらいの本が出ていますが、全部買うことは難しいとしても、全国の県立図書館クラスでは、資料購入費は平均で9千万円程持っていますが、基本蔵書として県立図書館が当然集めるべき資料を備えること。それからもう一つ、県立図書館の資料を市町村立図書館に届ける資料搬送システムとして定期的に巡回協力車を回すこと。この三つの条件を備えることによって、市町村立図書館の活動をバックアップする、強力に支援するということが県立図書館の重要な役割というふうに変わっています。ですから、今後県立図書館をどう整備すべきかということが大きな課題となります。

現在、資料の搬送システムとしては、車1台で月に2回ないし1回、県下の全市町村立図書館のほか公民館図書室、6町村だけまだ図書館ができていない所がありますのでそういう所も回っているんですが、全県下の市町村を回っているわけです。

それから、図書館の電算システムですが現在準備中で、平成9年4月本稼働に向けて平成5年から始めている事業ですけれども、今流行のクライアント・サーバーシステムでウィンドウズで画像処理もできるというシステムで、インターネットにもすぐ移行できるようなソフトでやるということになっています。データベースは、県立図書館で現在持っている45万冊の蔵書と国内の新刊情報、その他に郷土資料に関して、石川県で出ているすべての本の情報と、本そのものをすべて集めるよう努めており、それも1冊だけでなく、3冊集めるようにしておりますが、そういう新刊情報や郷土の出版情報をもデータベースに入れて、県立図書館にない本の情報もわかる。こういう本が県立図書館にないということになればリクエストもできる。それから、県内の公共図書館の蔵書の情報、これはすべて入れることは難しいですが、2年程度の遡及分の総合目録、どの図書館にどう

いう本があるかという情報もデータベースに入れて、それを県内41市町村の図書館や公民館に端末を備えていただいて、INS回線を通じてネットワークを組みたいと思っております。例えば、七尾市民が七尾市立図書館に行かれた時に、カウンターの端末で調べたら七尾市立図書館にないけれども県立図書館に聞いて見ますよということで、県立図書館のデータベースを検索したら読みたい本があった。どうしますかと聞きますと、今度車はいつ来るのですかと、巡回車の予定は七尾市立図書館で把握していますのでいつきますよと、ではその日でよいから貸してくれるように頼んでくれというときに、ボタンをぼんと押すと県立図書館に七尾市立図書館から貸出申込みがきているよとメッセージが入る、そこで予定のスケジュールで本をお届けすればその七尾市民の方が県立の本が利用できるというように、七尾市立図書館の職員がお客様と対話しながらいろいろなやりとりができるようにしたい、即時にそういう処理ができるようにしたいと考えているわけでございます。県立図書館には情報だけでなくある程度本があり、リクエストされた本についてはちゃんとお応えできるという能力も当然必要となります。

その他、最近の新聞にもありましたが、石川県では情報ハイウェイ構想というのがあり、この10月から県の企画の方に情報推進室を作ってそこで検討していますが、今のところシステムの一部を実験的に平成9年度の後半からやって10年度当初から本格稼働したいという計画でまだ確定的ではありませんが、そういうことを県はやりたいと考えていまして、この情報ハイウェイという高度情報通信網が県内に整備されると、INS回線を通じて全県下の各地域から県立図書館のデータベースが非常に高速で検索できるようになる。また、この図書館システムとしては、例えば、図書館のいろいろな案内や子どもの絵本の表紙画像をデータベース化して画像がみれるようにしたいと考えています。なぜ絵本を画像化するかと言いますと、児童は文字で本を選ぶのではなくて、イメージ、絵で本を選ぶということがあるのではないかと、そういう時に絵を選んでそれがその絵本の目録情報につながっていくというようなことを考えて今検討を進めていますが、そういう情報も市町村から検索できる。もう一つは、県立図書館に貴重書がありますが、それをデジタル化してネットワークで見れるようにしたい。それから、インターネットという話が出たのですが、図書館の情報へのニーズが今非常に広がっているということは県立図書館も認識しておりまして、学術情報センターや

民間データベースですとか、あるいは、外国ということもあろうかと思いますが、インターネットを通じて多様な情報を引き出しニーズに応えるということに速く乗っかっていけるよう進めていきたいと思っています。

当初は公共図書館のネットワークを優先し、大学図書館とのネットワークも早い時期にやりたいと考えておりますが、ただ、大学への資料の搬送システムは確立していませんので、相互貸借をする場合には郵送になるか、あるいは来ていただくことになるかも知れません。また、先ほど野田先生から、大学の学生さん達は専門書だけでなく、一般書、入門書も欲しがっているというお話がございましたが、学生さんも県民ですので、資料の整備や提供についても大学図書館の方と協力しながら進めていくべきだと思っています。

公共図書館からのお願いとしては、随分前に調べたので古い統計ですが、昭和63年の県内大学図書館所蔵の学術雑誌の統計で、日本語雑誌が合わせて1万タイトル以上、外国語雑誌が6千タイトル以上、細かい数字はちょっと覚えていないのですが、合計1万6千タイトル以上ありました。それに比べ、公共図書館の雑誌所蔵タイトル数は3千位しかないのです。ですから圧倒的に大学図書館が多い。例えば、雑誌記事索引で調べて、欲しい論文がどの雑誌に載っているということがわかれば、その雑誌を所蔵する大学で閲覧やコピーができる。金沢には大学が多いですが、そこで公共図書館としては今申し上げたように雑誌の所蔵タイトルが少ないので、近い地域で大学図書館との密接な協力関係ができないか。大学図書館が持っている学術雑誌を民間の企業や一般の方も利用できるような体制、金沢大学図書館は受け入れていただいているわけですが、学術雑誌の利用の協力体制が県内の図書館間でできないかと考えています。学術情報センターのデータベースには私どもも約800タイトル位のデータを登録してありますが、その登録者にはデータをあげますよというお話を聞いておりますので、そういうものを各大学図書館の協力をいただいて地域の総合目録ができないかなど、もう少し研究しなければいけないわけですがけれども、そんなことを将来の課題として考えていくのもよいのではと思っております。

今まで公共図書館と大学図書館との協力関係は、先ほど小堀図書館長さんからもお話ございましたが、ちょっと疎遠であったかも知れません。私どもも大学図書館の事情をよく知らないという面があったのではないかと反省しています。

今後は、石川県図書館協会という県内の各図書館が加盟している団体がありますが、そんな会で検討・協議を行い、もっと親密な関係を築いていくことが必要だと痛感しています。

#### 【司会】

どうもありがとうございます。公共図書館というと私どもあまりこれまで研究していませんでした。これからは、大いに連携を取りながらと思っております。

それで、私ども金沢大学図書館の文献数につきましては、この概要の8ページにございまして、実は図書数が平成6年度の終りで140万冊ございます。ただ、140万冊ございますが、中央図書館に所蔵している分は約40万冊程度でございまして、各研究室学部の方で保管していただいているということでございましてその点も県立図書館、公共図書館等との違いだと思います。

あと、各パネラーの先生方にお話をお願いしましたが、各先生方のお話を聞きながら、この点を補足したいということがございましたら、パネラーの先生方お願いしたいのですが。

#### 【永田】

二、三補足させていただきます。私の話はデジタルライブラリーの事例紹介になってしまいました。今日的な前提ですので仕方ありません。

ところでデジタル図書館を考える場合に、我が国の場合は往々にしてドキュメントデリバリーを典型的な働きとしていることが多いのです。あるところの一つのファイルを置いてペーパーのコピーを電子的に配るという構想です。これは大学図書館が研究者のニーズに応えなければいけないということ慮ったもので大変結構なんです。ただ、こういったものはどちらかというと集中的なセンター・システムとして考えることが多く、また、そういう形では最大公約数的なサービスという設定になりがちなんです。それはそれとして意味があるのです。しかし、途中の議論は時間がないから結論だけ先に申し上げますが、利用者の要求は多様であり、それは、センターではとらえにくいのです。要求は研究現場としての大学にあるんです。大勢が必要なものもあれば、また、希少なピュア・サイエンスの要求もあるわけです。集中的サービスも結構だけれども、ネットワークの時

代になって各大学が正確に要求をつかみ、かつ新しい技術を使って相互に協力し合えるようにしなければならないのです。図書館運営において基本的に要求をベースに考えていくということが、それもいろいろな種類の要求ですね、重要かと思えます。

先ほど八重澤先生のおっしゃっていた、日本の学生はなぜ図書館を使わないかという問題は、簡単に言えば要求がないわけですよ。刺激的に言えば要求がないというよりも、要求を学生に持たせないわけです。つまり、教育がそのような教育になっていない。また、今後の教育改革とか、大学改革の中で言われている情報リテラシーをどうするかという問題もあります。（コンピュータ・リテラシーの問題ではないんですね。コンピュータ・リテラシーは誰もが必要なことではない。情報を使いこなせる力が必要なんです。）そういった教育をするのが重要だと思います。図書館の側も、そういった面にも目を向けて、教育活動を支援していかなければならないでしょう。

デジタルライブラリーの開発において、日本の場合はさきほど申し上げたようにドキュメントデリバリー一本槍という感じがすごく強いんですが、オランダあるいはイギリスやアメリカで非常に多くの大学が試みていることは何かと言いますと、学生用の資料をきちっと学生に渡せるようなシステムの整備です。例えば指定図書を一時に大量に学生に渡すように準備しますと複本ばかりで図書館は翌年から大変なことになるんですね。デジタル化すればそういった問題も回避できるのです。これは教育の面の要求だと思います。研究の面の要求はアクセスを確保することですから、図書館が情報サービスをゲートウェイとして整備されること、あるいは、ネットワークのナビゲーション技術を図書館員が持ち、研究支援を行うことなどでしょう。さらに、「開かれた大学」と私は書きました。地域への貢献、さらに企業との研究協力の支援です。そういった部分も図書館にできる事業です。

レジュメ2の2のところでは一番言いたかったのは、残念ながら学長先生はお帰りになったんですけれども、図書館を良くするのは学長次第だということです。学長が図書館長と総合情報処理センター長を組ませてきちっと方針を出すこと、これがキーです。アメリカは図書館が大変発達した国と言われていますが、やはり学長がこの問題についてあまり認識していないところは良くないんですよ。

図書館長だけではどうにもやっていけないんです。特に日本の大学システムでは学部中心のシステムですから、図書館というのは言ってみればコンマ以下の組織ですから、学長の指導性が重要な問題になります。またこちらで総合情報処理センター長と図書館長が仲良くしていただいているのを、私は拝見して嬉しく感じたんですが、この両者が密接ですと、情報の技術について新しい方向だとか、デジタル図書館などの論議もできる。研究開発ができるのです。図書館は研究開発部門を持っていませんから、新しい展開に関してはどうにもならない組織なんです。そんな関係も情報環境整備の突破口になると思います。

最後に、人的資源の育成という問題について一言。

さきに、ティルブルグ大学の事例について話しましたが、ティルブルグ大学図書館長と話していて、彼はソフトウェアに金を出すんだったら、やっぱり人的資源に金を出した方がよいと今でも考えていると言っておりました。ティルブルグ大学図書館では、これまでの資料があって、インテグレイテッド・ディスクトップが並んでいて、その横にレファレンサーがずっと並んでいるといった設定です。その人達は通常自分の仕事、つまり、データベースの作成をしているんですが、利用者サービスのフロントにいつも出ている。人と資料と新しいメディアが統合しているのです。このように人はサービスの中心となります。そして今後、新しいものを開発しなければならない、それに人々が新しい条件について行けるようなことも考えなければいけない、ということで、人的資源の育成問題は現下の最重要課題だと思います。

#### 【司会】

参加者の皆さん方でご質問・ご意見がございましたら、この際、ぜひいただきたいと思います。

#### 【県立図書館 小川】

非常に近いところに立派な図書館があるんですけども、県立図書館としては、館長も先ほど申しましたけれども、学術関係の情報が欲しいと思います。県立図書館にいらっしゃる人の中には当然学生さんもいらっしゃるんですけども、論文とまではいかないけれども、本当の専門的な情報を必要としていらっしゃる

方が、特に県立の場合は非常に多いわけなんです。その辺で情報そのものがどこにあるかという情報も当然必要なわけなんですけれども、例えば、各学部で研究紀要をまとめていらっしゃるんですよね。それからそういうものに関して、部数は何部かあれば各学部のを県立の方に預けるという形、そういう資料交換のシステムもお願いできればと思ってるんですけれども、また検討いただきたいなと思います。

【司会】

ぜひ私も送るように各学部にお願いしたいと思います。紀要につきましては、現在学術情報センターでデータベース化しています。

市立図書館の方もおみえのようですが、本日のパネリストにお願いしておりませんので、何かありましたらぜひお願いします。先ほど表館長から玉川図書館は保存図書については重点的におやりということでご苦労もあろうかと思しますので、その点のお話もいただけませんか。

【市立図書館 田中】

うちは近世資料という藩政時代からの資料を持ってまして、現在、古地図を年間何百万の予算で修復しているんですけれども、保存に関しては、書庫もいっぱいになっておりまして、これから集めていく古書類の保存をどうしていくかということを考えております。何かアドバイスがございましたら。

【司会】

修復につきましては、何人か専門家の方がおられるんですか。

【市立図書館 田中】

京都で勉強されて来た若手の方が、修復に来ておられます。

【司会】

泉野図書館が今、私たちが大変羨ましいくらい貸し出しが多いそうですが、何か秘訣があるのですか。

### 【泉野図書館 小松】

貸出しが多いということにつきましては、秘訣というわけでもないと思いますが、利用に関して、臨界点があるような気がしますね。市立図書館の歴史の上で言えば、玉川図書館ができたときが一つ、泉野図書館ができたときが一つ、貸出しの量が数倍に増えております。その数倍に増えたことによって、市民からの要求というものも爆発的に増え始めるということですね。利用を増やすということが、要求に対しても増えていき、それが図書館の発展となるのじゃないかと思えます。今、貸出しに追われつつ考えている点です。

それともう一つ、公共図書館は、公共図書館のネットワークとして流通を考えております。国立国会図書館をトップとしまして、県立図書館、市町村立図書館というものの塊としていろいろ相互貸借をしながら資料が流通しているわけですが、大学図書館も学術情報センターとか新ネットですか、そういうものの形で流通というものがある。その流通それぞれがまだ接触していないと申しますか、それぞれの接触点がないままに進んでいっているという形があると思えます。そういうものを地域で接触させていただければ、金沢大学を通して全国の図書館にこちらでもお願いしなければならないことがたくさんあるのではないかと思いますし、また、微力かもしれませんが、大学図書館から公共図書館の集合体としてのネットワークにご協力できる点もあるのではないかと思います。

### 【星陵女子短期大学図書館 大谷】

永田先生に一つ基本的な質問なんですが、冒頭で、ILLの抱える本来的な矛盾として資源の共有は基本的に不自然な点があるとおっしゃったと思えます。この点について、もう少し詳しいお話をお伺いできませんでしょうか。

### 【永田】

その点については後程触れるということで忘れてしまいました。ごめんなさい。資料は物ですから、例えば金沢大学の図書は金沢大学が所蔵（有）する物ですよ。それをほかの大学図書館に相互協力の約束を結んで貸すわけですが、やはり、所蔵したというのはそれなりにその本を占有したいということであるわけですか



ら、空いていれば貸してあげるわけですが、そうじゃないときは具合が悪いといった問題が出てくる。ILLには基本的にそういった問題が解決しきれない。ILLの一番の問題は何かと言いますとスピードだと思うんですよ。要するに、物が行って帰って来るのを待てないわけなんですよね。それが待てる、あるいは資料が動かない、そういう状況でしたら解決するわけですよ。ですから、デジタル化して情報を送れば相互協力は可能になるのですね。そういった意味でもデジタル図書館は有望なのです。

【富山大学情報サービス課長 重里】

先ほど泉野図書館の方でしたか、これは永田先生のほうに聞いたほうがよろしかったかと思いますが、県立図書館でも学術情報センターのILLシステムとか目録システムに関わっているところもあるようですので、そうすれば、そちらのほうを利用できるかと思います。それからこれは富山県の実情なんですけど、県立図書館の方で生涯学習ネットワークと言うものを構築されてまして、そちらの方で公共図書館、あるいは大学図書館、富山大学の蔵書目録などを提供されています。これは今のインターネットでなくて、従来の専用回線と電話回線のモデムを使った利用です。それから、富山大学の特殊な事情ですが、今年度の補正予算で図書館の増築が認められまして、今は、4300㎡のものなんですけれども、今年度増築が5000㎡くらいありますのでこちらの金大さんと同じくらいの建物になるかと思います。それで、やはり図書館の中に先生方に入っていただいて、図書館の高度化専門委員会というものを設けまして、さきほど野田先生がおっしゃった資料費の捻出の問題とか、資料の集中化ですね、やはり、研究室学部等に資料が分散しておりますと、どうしても学生の利用を妨げますし、ILLで申し込まれたようなリクエストに対しましても早急に対処できないということもありまして、その辺を今小委員会で検討している段階です。今回のシンポジウムはそういう意味で参考になりました。どうもありがとうございました。

【司会】

ありがとうございました。

## 【文学部 溝部】

収書のことについて野田先生がおっしゃられたことは大賛成で、本の買い方というのは非常にまちまちなので、いつも疑問に思っているのですが、野田先生のご提案の方向は図書の委員会を活発化にするという方向なんです、その方向の可能性についてなんです、私見では図書委員会方式ですとたびたび人が代わるのでなかなかむずかしいので、なるべくなら、専任の方を置かれるほうがよろしいと思うんです。現在、本学の図書館では、専任の方がいらっしゃるのかおたづねしたい。これは、永田先生もおっしゃったように学長先生に聞いていただくことかもしれないんですけども、学部の予算で本を買ってそれを図書館の本にするというのは、やはり、今後のことを考えると可能性がせまくなり過ぎるのではないかと言うふうに思っているのですがいかがでしょうか。

## 【司会】

実は本学は、どこの大学でも同じでしょうが、図書館独自で図書費というものを特に持っておりません。文部省等へわれわれも要求しているのですが、ほとんど運営費の一部がきています。あとのものにつきましては、要求しますと、先生方の積算校費の中にすでにそれは入っている。それは大学内のところではがんばりなさいとなりまして、非常にむずかしい問題がございます。これは、やはり、学長初め各先生方の図書館に対する考え方の問題だろうと思ひまして、あえてこのシンポジウムをやりまして、その点が出ましたことを私は非常に嬉しく思っているのですけれども、いづれにしましても図書館自身で図書の選定をする範囲が非常に狭うございます。それについて、各図書館職員はプロパーでございますので、本の出し入れのみならず、そういう方面にも自分の力を発揮したい。それから、学生が図書館にやって来たときにどういう本が、どういう研究するには、どういうところの開架をみればいいですよという、レファレンスも非常に頑張っておりますので、そのへんのところで図書館委員会の下部がよろしいのか、また別に選定のそういうところを設けたほうがよろしいのか、それから私どもの大学としての特徴を出して行ければなあと館長としては思っているのですけれども。それからもうひとつ、さきほど永田先生のほうからありました、学生のシラバスに対しての参考図書・指定図書の扱いを図書館はどうすればよろしいか、こ

これは学生部の問題もありまして、シラバスに載せてあります参考図書それから、指定図書、これらがやはり図書館にあれば少なくとも一冊はありますよというのが私は一つの図書館の仕事ではなかろうかと思うのですが、この点につきましても、まだ先生方への投げかけ、ご理解等これからの問題じゃなかろうかと思っております。各大学図書館ともそういう気持ちじゃなかろうか思います。またひとつよろしくご協力をお願いします。

#### 【須原】

いま図書館の貸し借りの問題、いろいろと複雑なものがあると思います。それぞれのところで努力されて購入された書物です。ひとつ私感じますのは、図書館の書物というものは原則として貸し出し無料ですね。それを例えば学情センターでもどこでもいいんですが、情報としてアクセスするとお金を取られます。この問題非常に大事なことだと思います。だから、やはりなんといいですか、図書館が提供する情報というものがみんな無料でいいのかどうかという問題もあります。そこで図書館に本を集めるときのフィロソフィーが問題になると思います。

#### 【司会】

どうもありがとうございました。実は、今朝の朝日新聞に投書がございまして、「蔵書の行く末気になる年」というので72歳の方です。自分は本をたくさん持っているが2階の方もだいぶ痛んで来たので、そのためにしばしば古本屋さんを呼んで本の処分を行っている。それで最終的に残ったのは、自分が非常に大切に感銘深く読んだものは捨てがたい、とそれからもう一つは、まだ読んでいないものが相当ある、ということで、こういう問題もこれから各市民の皆様方がたくさんお持ちでないかと、そういうものについて図書館への寄贈等がこれから出て参ると思えますし、また出ていただきたいのでございますけれども、それらの文献の選択をどうしたらいいのか、どの本がいいのか、悪いのか、そういった問題もこれからの我々大学図書館は学術図書、また、公共図書館はそういったような市民のお持ちの図書、そういうものの整理も非常に重要になって来るのではなかろうかと、今朝の新聞を見ながら感じておりました。

先ほどからパネリストの先生方、また、参加の皆様方のご意見等をお聞きして、

そろそろまとめの時間でございますけれど、なかなかまとめもむずかしいのでございますが、どうも聞いておりますとこれからの図書館としては、目録所在情報データベースと言いますか、どういう本が何処にどういう具合にして格納されているかと、そういうものの検索のシステムの構築がまず大事じゃなかろうか、いわゆるデジタル図書館、電子図書館の考え方が、そこで思い出しますのが、実は私の恩師に名古屋大学を退官されました成岡昌夫という先生がおられまして、この方は構造力学とか、振動学の先生ですが、この方がもう20年ほど前から振動学、構造力学のデータベースをわしが作るんだというので、毎日毎日ベースを打ち込んでおられました。もう汽車に乗っても、電車に乗っても、飛行機に乗っても、待合いに行っても、いつも、その校正をやっているという方でございます。私、その時、つくづく思いました。ああ、恐ろしい先生だなと、こういう先生がおってこういう研究をしようと相談すると、ぼんぼんとたたいて、それは、何年何年に誰と誰がやっているからもう駄目だと、ということで「もうこれでは『先生、勤まらん』な」ということで、先生に是非「知らぬが仏ということもあるのだ」と言いたいな、と思っていました。まだ健在でございますので、あまり言うとな怒られます。そういうことで私、こういうデータベース等が進んで参りますと、先ほど申しましたように蔵書等につきましても、また、保存図書といった文化財的でございますとも、なにが大事で何を残すかということの見識を持って選択できる、いわゆる、図書館が必要ではないか。また、先生方にもその点をお願いしたいなと、いう具合に思います。また、検索については先ほどからデジタル図書館と言われますけれど、キーボードを押しますと、一発、本の文献がさっと出ると言うことでございますが、野田先生がおっしゃいましたように、研究というものは、単にデジタル的じゃなしに、アナログ的なこともある、つまり、時間軸に添ったアナログ的な検索方法、またいろいろな文献を調査しましても、それに沿って枝葉的に研究が進んで行くと、また、逆引きの情報処理、そういったようなことで、出来れば、今後のデータベースの構築については、時間軸に沿ったアナログ的な検索が出来る、そういうデータベースの構築をやはり図書館としても将来に向けて考えるべきではないかと、もちろんデータベースは質と量の問題でございますが、量だけ多ければいいというのではございませんので、その質の問題、これらも含めて、これからの図書館の問題ではなかろうか、もう一つ

は公共図書館と大学図書館の本質的な違いでございますけれど、私はやはり、公共図書館は市民の皆さんが手軽に本に触れていただく、いわゆる本との出会いの場所ではなからうか、という具合に思います。それをもとに新しい興味とか研究が芽生えてまいります。

また、一方大学の図書館は、やはり各人がある一つの研究テーマを持って調査研究に来られる所、いろいろな文献の調査その他につきましても、そういう面で大学の我々としては、そういう方に対してもお手伝いが出来る職員の養成ということで、今後考えて行きたいと思えますし、いずれにいたしましても、大学図書館と公共図書館の役割の連携、これが重要ではないかと思えます。

今日は、長時間に渡りまして、図書館シンポジウム「これからの図書館を考える」ということでしたが、考えるだけでお前は何もしないのか、とおっしゃいまして、今日は考えますので、明日からそれをどう実行するのかを、図書館委員の方々と協議しながら、図書館の運営に活用したいと思えます。今日はどうも長時間ありがとうございました。

#### 【進行】

どうも、お昼から長時間に渡り、ご熱心にご討議いただきまして、ありがとうございました。これをもちまして、金沢大学附属図書館シンポジウムを閉会とさせていただきますが、これからも図書館にいろいろご提言、ご提案等を賜れば、幸いに存じております。

それでは、本日は、大変どうもありがとうございました。

